

芝の家は砂糖を商つてゐるので、行つては店先で、白砂糖をつまんで食べる。

人々が自分を狂人視して、敬遠しだした事は解る、町の郵便局へドナリ込んだ事もある。

「俺に關した郵便物に關して、事故を起しやがると、顔を見れば一目で知れるから、呪ひ殺すぞ」とおどかした。

局長が出て、横柄な面をして見下すので、唾を吐き掛けて歸つた。

僕も色々と準備した。何處かへ出掛けなければならぬ。

黒子の女は大阪に居るのだ。

床の壁に小さな丸い鏡があつた。

紐が付いてゐるので、それを首に掛けると、鐵だから重くて冷い。鳩尾の所にあたる。

僕は着物をキチンときて、兩方の袂に、万年筆や手帳や、文鎮や、様々なものを平均して入れて、インパネスを着て、布團の端に穴をあけて肩掛にしばつて、片手には大きい人形の首のないのを提げ、木刀を持つて家を出様とした。

父が僕を引きとめ様として、しがみついて來たので、僕は父の喉をしめる。